# THE SLICES OF THE USA

AMERICAN BOOK JAM
Literary Issue

9人の
作家が描いた
それぞれのアメリカ

DENNIS COOPER
RICHARD HELL
JOE MAYNARD
JOEL ROSE
KAORINTAUMI
HIROMI ITO
TOSHIKI
KOMAZAWA
HITONARI TSUJI
TAKUO

**Editor in Chief**
秦　隆司

**Senior Editor**
佐藤由美子

**Editor**
宮家あゆみ

**English Editor**
Sharon Mesmer

**Planning・Production**
岩間洋介

**Creative Design**
吉川進
たかさごかずえ

**Special Thanks to**
(NYC)
辻仁成　山崎隆広
Ron Kolm 市橋栄一
Ira Silverberg
(Tokyo)
田辺初子　高橋謙太郎
西尾大作　石橋綾子
楠田明子　石本香織
森朋子　鈴木加代子
田村昌洋　大森不二夫
Timothy Moran

**Publisher**
Takashi Hata
発行人：秦隆司

**Published by Back Up Publishing**
**発行所：バックアップ・パブリッシング**
**(Back Up Co.)**
American Book Jam Literary Issue, 1998
1998年1月10日発行

**●Back Up Publishing New York**
160 Bleecker St.,1BW
New York, NY 10012
Tel : 212-477-7539 Fax : 212-505-0567
E Mail : backup@interport.net

**●Back Up Publishing Tokyo**
〒151-0053 東京都渋谷区代々木5-29-8
代々木コーポラス503号
Tel : 03-3485-4423 Fax : 03-3485-4435
E Mail : backup@kt.rim.or.jp

＊販売・広告お問い合わせ
(N.Y.) Tel : 212 - 477 - 7539
(Tokyo) Tel : 03 - 3485 - 4423
紙：菊田洋紙店 TEL: 03-3663-2781
印刷・製本：宮田印刷 TEL: 03-3260-5414
製版：シンセイプロセス TEL: 03-3943-7911
＊今号は活版印刷で制作

© 1998/ Back Up Co. ●無断転載を禁ず
Printed in Japan

＊ABJにもインターネットのホームページが出来ます。現在は準備中の表示になっていますが、３月頃にはABJ本誌では紹介できないユニークな記事を楽しんでもらおうと健闘中です。(編集部)

## ABJ今後の予定

９８年４月発売予定のABJNo.4（春号）は、日本に滞在した伝記作家ティモシー・モラン、詩人シャロン・メズマーのジャパン・ジャーナルと、本誌副編集長・佐藤由美子の日本発のレポートによるジャパン特集になる予定です。
また、夏号以降に、南部特集を予定しています。
98年もABJにご期待下さい！

## 「読者のお便り」大募集

リテラリー特集も楽しんでいただけたでしょうか？はさみ込みハガキ、ファックス、E-Mail等で、ぜひ皆様のご意見、感想をお寄せ下さい。『LETTERS』で掲載させていただくこともありますので、匿名希望の方はその旨をお書き下さい。編集部一同、皆様からのお手紙は元気の素になっています！
なお、東京オフィスは移転のため住所が変わりました。お手紙等の送り先は下記をご参照下さい。

宛先：バックアップ・パブリッシング
アメリカン・ブックジャム編集部
(東京) 〒151-0053 東京都渋谷区代々木 5-29-8
代々木コーポラス503
E-Mail : backup@kt.rim.or.jp
(N.Y.) 160 Bleecker St. 1BW New York
NY 10012 U.S.A.
E-Mail:backup@interport.net

## ● From Editors … ●

**(NEW YORK)**
僕はニューヨークの紀伊國屋によく行く。そしてＡＢＪが置いてある棚の近くで、誰かがＡＢＪを手に取るのをじっと待つ（何故か悪いことをしているような気分になってくる）。一度などはＡＢＪを7分15秒も立ち読みしている人に遭遇した。もし、ＡＢＪの棚の近くで、コンピュータ雑誌を読む振りをしてチラチラ辺りの様子を窺っている人物がいたとしたら、それは私です。(ハタ)

ＡＢＪが予定通りに発売されるということが、こんなに忙しくなることだとは思っていなかった。ダウンタウン・ライターたちの精力的な活動ぶりにもいつも圧倒される。９８年は体力をつけて更に頑張ろうと思う。でも私は一体いつスキーに行けるのだろうか？（ミヤケ）

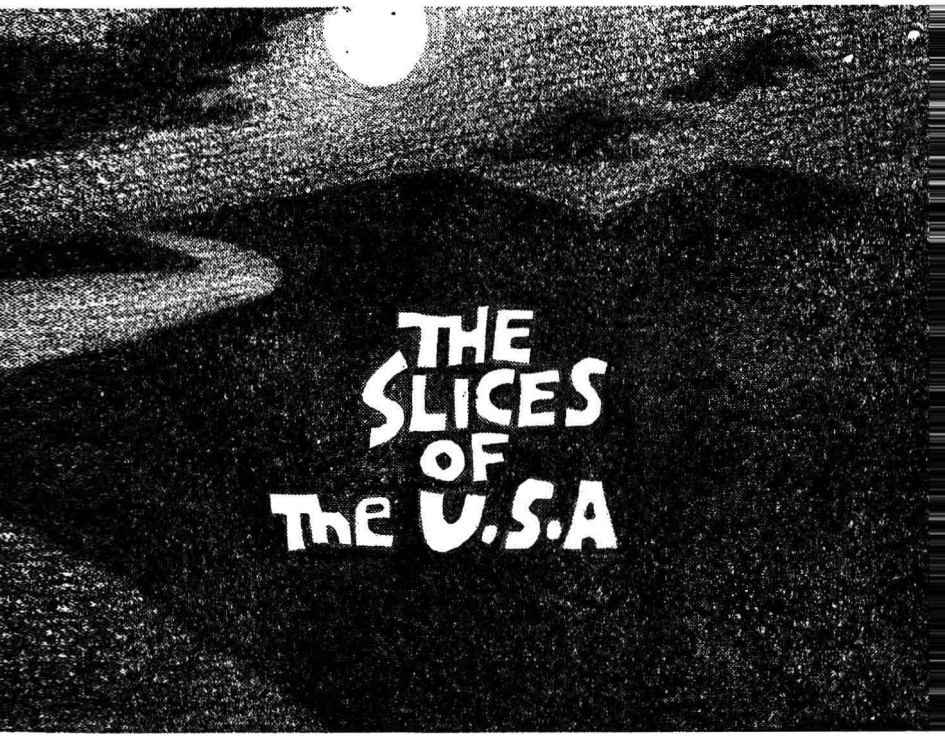
**(TOKYO)**
編集作業をしながら、物語りを読む楽しさを再び味わえて幸せでした。それぞれ個性的な作品ばかりですが、皆さんは誰の作品が気に入りましたか？ぜひ感想をお寄せ下さい。
今年98年も毎月最終火曜日の夜８時から高田馬場のベンズ・カフェでABJ主催のオープン・マイクが開かれる予定です。ぜひ遊びに来て下さい。詳細は編集部までお問い合わせ下さい。TEL:03-3485-4423 FAX:03-3485-4435 （サトウ）

コミックリーダーとして大活躍してくれたタケ＆アヤに98年６月にベビー誕生予定。まだ男の子か女の子かは？なのがネックですが、読者の皆様から名前を募集したいそうです。はさみ込みハガキを使ってぜひ応募して下さい。結果はベビー誕生後、発行されるABJにて発表します。宜しく！

“Have a Slice of American Pie.”

江苏工业学院图书馆
藏书章

人はアメリカに何をみるのだろう。
僕のアメリカは他人のアメリカとは
違うはずだ。
人種と言葉の差を感じ、
なおかつアメリカン・ドリームで
ＯＤ（オーバー・ドース）しそうな毎日。
いろいろな人々のアメリカを知りたかった。
今回はその思いを短編集という形にした。



アメリカに住んだ、
あるいは関わった日本人と、
アメリカ人の作家に原稿を依頼した。
自分のアメリカとは違うと
そっぽを向かないで読んで欲しい。
どの作品も、アメリカがなければ
生まれていないものばかりだ。
ＡＢＪ特別号はリテラリー特集
「The Slices of the U.S.A.」だ。
アメリカン・ブックジャム編集長
秦隆司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# CONTENTS


Boy Meets Death, Boy Falls In Love ● Richard Hell リチャード・ヘル 7

踊ろう、マズルカ ● 伊藤比呂美 Hiromi Ito 19

What Colt Did ● Joel Rose ジョエル・ローズ 37

Tiger ● Joe Maynard ジョー・メイナード 53

Introducing Horror Hospital ● Dennis Cooper デニス・クーパー 65

SAINT OF ME ● カオリンタウミ Kaorintaumi 89

*Un*made in U.S.A. ● 保田卓夫 Takuo Yasuda 109

好青年 ● 辻 仁成 Hitonari Tsuji 133

苦情箱 ● 駒沢敏器 Toshiki Komazawa 153

翻訳者紹介 189

イラストレーター紹介 190

a piece of Tokyo 191

アメリカン・ブックジャム・クルー 198

# SLICES OF THE U.S.A.

## 9人の作家が描いたそれぞれのアメリカ

THE SLIC
F-
THE
U.S.

Richard Hell

# BOY MEETS DEATH, BOY FALLS IN LOVE

THE SLI
OF
THE
U.S.

Translation : Chikage Takizawa

Illustration : David Borchart

リチャード・ヘル

翻訳：滝沢千陽

イラスト：デイビッド・ボーチャート

「病は存在の喪失ゆえに、悪しきものだと我々は考える。しかしながら、死が生と同じように現実であるなら、だからこそすべてが存在するのなら、たとえ病める状態であれ、あらゆる状態はそれぞれの在り方で絶対的なのだ。『否定された存在』は、生と死という二つの完結した状態の間を行きかう唯一の手段であり、だからこそシステムのすべてを支配する権利が与えられている。」

クロード・レヴィ＝ストロース著

〝The Raw and The Cooked〟より

まさかこの俺にとって空の存在がこんなにも大事になるなんて——。友達のマイクは言う。登場人物が一切なくて、天気についてだけ語った小説をずっと書きたかった、と。俺も空を語ることができればいいのに（俺も年をとったか）。今や俺が見守りたい、理解したいと思うのは、雲の形に象徴されることくらいだ。そんなものが雲にあるとも思えないけれど。

ノンストップのモノローグにこそ、何かが語られているはずだと思う。タイムズ・スクウェアの電光掲示板に刻々と流れるニュースのように、それは自信に溢れ、スケールも大きくて美しく、生き生きとして、潔い——。

人生のあまりに多くは中途半端な出来損ないばかりで、例えば1・愛と「セックス」——こんなもんで何を生み出そうというのか？　何をするつもりだ？　仮にセックスと「愛」で語れることがあるとしても、言葉は捕獲と周縁、孤独のためのものだから、本当のところ愛と「セックス」を語ることなどできやしない。はっきりさせるなんて不可能だろう。例2・人間はみんなどこかとち狂った孤独な存在で——「臨床上」狂っている人間と丸く座していると、それはまったく連続体というかサークルのようなもの、いつ何時「おまえだって狂っている」と指差されるか知れない。たまには多少明るい気分になるけれど、どれも自己欺瞞のように思えてくる。人生なんて不純でぶざまで、不自然な死、死が嘘をついているようなものだ。つまりは真実が欲しければ、まずは死を選ぶことだ。

昔は俺も随分落ちこんで、人生や運命とやらにとまどい、自分を見失ったこともあった。それでも今の今まで、こんなに奇妙な考え方はしなかった。つまり「人生は死の中に在る誤りだということ」。怖いことに突然この思いが閃いた。インスピレーションというやつさ、「ああ、そうだったのか」。決してインテリ野郎が作りあげた陳腐な思想じゃない。毒入り瓶を持った父親を見て、長いこと具合が悪かった理由が突如判明したみたいな感じだった。

精神病やドラッグ、アル中の奴らが立ち直るための「AAミーティング」に参加した。そこにいる連



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中のほとんどがドラッグをキメていた。ドラッグといっても、向精神薬や躁鬱病の薬、発作を止める薬といった処方薬の類だが。どっぷり薬漬けの集団だったが。どの薬も楽しめたもんじゃなかったな。精神異常と診断されたわけでもないのに、俺は週に一度このミーティングに参加していた。何故か気に入ったからさ。会場にいた奴らはそれぞれやばい問題を抱えてはいたが、1・連中はどうにかやっているようだったし、少なくともミーティングに参加できるまでになった奴は、取り敢えずはハッピーエンドのお話ができたし、2・そこじゃクソの役にも立たない自己愛は最小限に食い止められていた。ゴミみたいな毎日をくどくど話しても、それ以前に奴らには立ち向かうべき問題が山ほどあるのは分かりきっていた。それに、誰も俺に何も期待していないのが良かった。誰もが好意的で、ひどく優しいのに、他人に何かを期待することがまるでなかった。

あんたもすぐ分かるよ。なぜ俺はこんなこと話しているんだろう？　事細かに言うことか？　考えてもみろよ。進んで自分の汚点を話そうなんて奴はそういやしない。奴らと俺を重ね合わせてみる。奴らに自分を見る。そうするといかに人間の視野は脳によって制限されているか、人間が成し遂げられることなど微々たるもので、しごく不完全で、つまるところ人間のやることなどすべて闇の中だ、ということが見えてくる。そしてあの感情がふと湧いてくるんだ。つまりは死こそ真実であり、生きているこの状態は調子はずれのコード、行き止まり（デッドエンド）、死から生まれたうす汚れた突然変異、死の中で泳ぐこと、死の養分で食いつなぐ不埒な寄生虫。生きていることこそ偽りであり、素材を間違えたグロテスクな代物——食い物で作った彫刻のようなもの——でしかなく、真実に到達するには死ぬしかないと感じるんだ。自殺するしかない、とね。その時俺はマジに自殺を考えていたわけではないが、自分のルーツが死に在るんじゃないかとは感じていた。大した具えもないくせにしゃかりきにやろうとするかの如く、手探りで生きている不正直さを、自分の人生に感じていた。

その特殊なミーティングがどんなものか説明しようか。まず、「強さと希望と経験」を「分け与え

る」司会者がトリプル・トラブル（三重苦）と呼ばれる定期ミーティングの存在を語った。精神病、ドラッグ中毒、かつHIVに感染した奴のための集まりだという。笑えるだろう。司会者がこれまでの人生について、ドラッグから手を引いてからの様子をしばらく語ると、次に他の参加者全員が最近の暮らしぶりを話す。ミーティングの骨子はこんなもんで、つまりは会場にいる全員に話す機会が与えられているわけだ。でもほとんどの奴はそう多くを語らない。幸せそうに微笑み、何日、何か月、何年クリーンでいたかを発表する。精神病の診断についてや、どんな薬を服用しているかを話すこともある。そして拍手喝采。

ひとり随分悩んでいる男がいた。その週彼は姉を訪ねていて、姉の話によると、数日前に家族の友人である九〇歳の老女がアパートの床に倒れて死んでいるのを発見したという。発見されたとき老女の顔はすでに黒く変色していたそうだ（見つけたのが俺じゃなくて本当に良かったと彼は言った）。で、彼が葬式について尋ねると、姉は、あんたが葬式に顔を出すのはまずい、と言う。なぜならその老女は彼を怖がっていたからだというんだ。でもそれが本当なら、理由はただ一つ、姉が弟のことを悪く言っていたからで、それを聞いた彼は心底頭に来たわけだ。

それから姉は彼に、友達と自分のために煙草を買ってきてくれと十ドルを渡し、あんたも何か買ってきなさいよ、と言った。買いに出かけたが、自分の好きな銘柄がなかったので、後で買うから2ドル50セントをとっておいてくれと姉に頼んだところ、「あんたはクラックを買うために金が欲しいんだろ」と言われたという。で、ここでも彼は心底頭に来たわけだ。

彼には姪がいるという。姉の七歳になる娘だ。この姪を本当にどうにかしないとまずいと彼は思っている。学習能力にも精神状態にも問題があり、早いところ何とかしないと、将来悲しいことになるという。姪は話すことも考えることも正常にできない。母親の昔の男を「パパ」と呼ぶように教えられていたが、実の父親に会ってしまって、これでまた訳が分からなくなった。しかも、数ヶ月前に飼っていた

猫の首を紐で絞め殺した、と最近になって打ち明けたらしい。今や姉は、怖くて姪と生後五ヶ月の赤ん坊を二人きりにしておけない。

こうした語らいが会場のあちこちで続いた。ある男は完璧に取り乱していた。もう一人明るい瞳をした男は六〇歳くらいに見えたが、これまでの自分は「コークをやり、ポルノ雑誌を見ながら自分の乳首をいじくって、射精して果てること」がとにかく好きだったけれど、このミーティングとリチウムと諸々のおかげで、ちゃんとストリートを歩けるようになったし、女の子の尻ではなく目を見れるようになったと叫んでいた。

俺はみんながやたらとたるんでしまりがないことにずっと気をとられていた。隣に座った男など、俺が今まで見た最も醜悪な人間の一人だ。どうやったら自分のことを怖がらずにいられるのか不思議だった。「オペラ座の怪人」のロン・チェイニーのように、寄せ集めた簾のような髪を肩まで伸ばし、額も頬骨もやたらと高く、ボタンのような鼻からは大きな黒いトンネルがまっすぐこちらを向いている。油で汚れた分厚い眼鏡をかけ、右のおでこには深い傷跡がざっくり刻まれ、肌は日焼けローションのような澱んだ黄色をしていた。しかも彼はショートパンツをはいていたのだが、足には女の子のようにまったく毛が生えてない。サンダルからのぞく足の爪は、白くすり切れた鉛のような重い足にくっついたオレンジ色した三日月形の角質だ。醜さがこれでもかこれでもかと重なっていた。俺は何としてもこの場の雰囲気を伝えたいんだ。分かるか、俺は自分のことを話しているのさ。いま描写したのは全てこの俺のことさ。

まだ話はおしまいじゃない。俺が救いを見つけられる場所を知っているか？　空だよ。空が一番信用できる。空を見つめるんだ、その色と形を。まずアパートの外に出なきゃならないんだが、これが結構たいへんだ。ボブ・ディランも救われるな。ボブの小さな曲は雲の形や色と同じくらいいいもんだ。ボブにはまったく感謝している。

それでもそいつは消えない。下のほうにずっとあ

るんだよ。今晩またミーティングに出席していたんだが、突然すべての連中――誓いや告白や自己の見直しを熱心に話して聞かせる参加者たち――が哀れなほどに、後世に何か残そうという人間の特性丸出しで、そうであれば何の意味もないように思えてしまった。いや哀れというのではなかったな、本当は。一種美しく毒があるようだった。俺は何とかそう思い続けようとしたが、その時何かがおまじないを解いてしまった。（俺はそれが何だったか知っている。泣きながら、不安やつらい子ども時代や絶え間なく続く自己嫌悪を、陰惨に語った奴さ）。

それでもしばらくは事を静観できていた。この七年ドラッグから足を洗っているＨＩＶ感染者で（まただよ）、六〇年代にはメセドリン中毒だったブルックリンの男が、ミーティングの提案や方向性という気休めと約束事をくどくどと説明していた。教会の壁を背にして喋る彼を、時間の超越と沈黙という高みから眺めると、彼の話など石の音色、葉にそよぐ風、ただの戯言である以外、何の意味も持たないと思えた。俺たちはみんなもうすぐ死ぬ。棺桶に片足突っ込んでいるようなもんじゃないか。俺にはそれが廊下の外、風のトンネルの外から見えた。あの男がやたらとでかい黄色いレンズの飛行士用眼鏡をかけて話している。音が消えて、無意味さが露呈し、それは何とも優しい感じだったのに、あの泣いている女の子が話す番になって、おまじないは解けてしまった。

これが青臭い能書きだってことくらい百も承知さ。昔、すべてが怖いほど愚鈍に思えると人生にすっかり失望してしまったガールフレンドに、この俺が話して聞かせたもんだ。「それはごもっともな考えだよ。でもそれに振り回される割合を決めとけよ」と俺は彼女に言ったものさ。いずれみんな死ぬことを分かっていながら、その考えを最優先させないのが一般常識というものだ。「大人」とはそんなくだらない考えに時間とエネルギーを費やさないことだってね。とは言え、今の俺を悩ますのは死ぬことではなくて、生きていることだ。

まだ言ってなかったが、実は今年俺は恋に落ちた。すべてはこのせいかも知れない。俺はどんどん

落ちて行き、とうとうタッチダウンして、すべてがとてつもなく見込みがありそうに思えた。夢に見るものは何も彼も手に入りそうに思えたよ。そうしたら、その娘が脳の電気的活動を抑えるためとかで向精神薬を飲むことになり、薬のせいで行動はすっかりのろくなり、よろよろ千鳥足で歩く廃人となってしまった。別人になっちゃったのさ。長い話なんだけどね。たいていの彼女は疲れて不機嫌だけど、きっと良くなるだろうと二人とも望みは捨てていない。

AAミーティングでは神を信じさせたがるが、俺にはどうしてもできない。実際問題となったら、そりゃかなりの覚悟がいる。最初奴らはこう主張していたんだ。神とは柔軟に考えるもので、人間は誰にも支配されないってね。半永久的にドラッグをやめたければ、自分を哀れんではならない、同時にすべてにおじけつくのもいけない、小さな信念を持とう……とか何とか。つまりはエゴのことだ。ドラッグをやめてあるがままを受け入れるためには、ちっとは謙虚になりましょうというのさ。でもミーティングに長く参加すればするほど、奴らはねちねちと考えを押しつけてくるんだ。結局奴らが言いたいのはお決まりの神だということが、ますます明白になる。「偶然など存在しません」とか「奇跡はおきます」とか「神はあなたが解決できないことなど与えません」とか言う。確かに信仰は素晴らしいことだろう。信じるには理由があるだろうし、信じれば事は簡単になるだろう。でも俺には信じる手段がない。つまらないものは受け入れられない。それで魂を失った恨みだらけの人間になったとしたら、俺はもう望み薄いね。でもそれが真実かも知れないし、そんなこと知ったこっちゃない。すべてがおかしいと思うこともあるし、「神」とやらが一番とち狂っているのかも知れないな。量子物理学でも勉強しろよ。

中年になったせいだろうか。こんな俺たちに比べて、清く正しく生きている人間なんて、圧倒的に少ないと思える。奴らは俺たちの「びびらないバージョン」でしかない。実は奴らだって楽じゃないんだ。ボブのことを考えてみよう。いや誰でもいい、キリストでもいい。でも……中年のことを話してい

たんだっけ。何でこう何も彼も変わっちまったかを考えていたんだな。守るだけの人生になっちまった。ひでえよな、退屈な連中なんてクソ食らえ。過ぎ去った自分の時間が懐かしい。高尚なビジョンを実現させようという思いも守れず、この世は生きるには値しない代物になり下がってしまった。性格も繊細さも本物ではなく、自分がそれらにへばりついているだけに過ぎない。自分は別の人格で、学習も報われず、つまりはすべて失われた幻想だ。

ある晩ジェニーとテレビを見ていた時だった。最近の俺をばっちり表すような出来事が起きたんだ。夜も更けて寝ようとしていたんだが、万が一いい映画がやっていたらとチャンネルを回すと、ジェーン・フォンダの映画が放映されていた。最初は何の映画か分からなかったが、ラウル・ジュリアが画面に現れて、俺はすっかり映画に夢中になっちまった。俺の頭がどう働いたと思う？　最初に彼を見たとき、顔は覚えていたが誰だか分からなかった。で、ビュン！　とひらめいた。ラウル・ジュリアだ！　それからの連鎖反応はこうだ。1・ラウル・ジュリアか。2・彼は死んだな。3・ラッキーなやつだよ。頭はこう回転したんだ。自分で自分に驚いたよ。

俺たちはたかだか脳に左右される代物だ。だから頭に来るんだな。いらいらするのは、そこなんだよ。すべてをひどく中途半端にしているのは、それなんだ、俺は自分の神になりたい（これこそ、あのアホなAAミーティングが期待していることだがね）。俺はすべてを知り尽くしたいし、すべてをこの目でしかと見たい。何の制約も受けずにね。すべてを手にしたい。他のみんなと同じようになるくらいなら、死んだほうがましだ。それで手に入れたら、またおそらく続いて行くんだろう。間違いない。

しかし再びあの思いがすっと俺を捉える。数分前にトイレに座っていたときもそうだった。俺の手がトイレットペーパーのロールをくるくる回しているのを見ていたら、それは遠い過去の無垢な記憶のような、夢のような、ひり出した糞も幻想であるかのような、イースター・バニーかサンタクロースのように思えてきた。一体俺に何が起こっているんだ？



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com